

台湾

# 歴史の記憶と新しい誇り

清水麗

## ●歴史を背負うスポーツ

二〇一五年に日本でも公開された映画「KANO」(二〇一四年)は、一九三一年に台湾から甲子園に初出場した嘉義農林学校(通称「嘉農」)の日本人・漢族・原住民の混成チームの活躍という実話を基に作られている。台湾では、興行収入が一〇億円を突破する大ヒットとなった。日本の植民統治時代に台湾に持ち込まれた野球は、台湾のアイデンティティや省籍問題、世代の違いを語るうえで、象徴的存在として扱われることが多い。

この映画の大ヒットによって、甲子園歴史館を訪れる台湾観光客が年間二〇〇人から一万人に急増したという。また、二〇一三年三月WBC(ワールド・ベースボール・クラシック)で日本に接戦で敗れた台湾チームが試合後にマウンドを囲み、東日本大震災への支

援に対して「感謝台湾!」の紙を掲げる観客たちに深々とお辞儀をするという出来事がニュースでも取り上げられるなど、野球は日台の結びつきを再認識させる強力なアイテムとなる。

「日本人から伝えられた」と語られるスポーツには、ゴルフもある。日本統治時代に建設された淡水ゴルフ場は、戦後陳金獅らによって再建され、一九六〇、七〇年代の黄金時代には、謝敏南、郭吉雄、許勝三、女子プロゴルフアーの涂阿玉ら数々の名選手が育った。まさに、「ゴルフ王国」であった。

一九九四年広島アジア大会では、この世代がコーチとして代表を率い黄玉珍ら女子チームが団体および個人で優勝、男子チームも団体で銀、個人でも銅メダルを獲得している。

近年は韓国選手の活躍に押され

ているが、一二〇万人を超えるゴルフ人口は今も増加傾向にあり、テレサ・ルーや曾雅妮の活躍など、「ゴルフ王国」の歴史は途絶えていない。

歴史を背負ったスポーツのなかでも野球をめぐる記憶は、台湾のアイデンティティ形成に微妙な影を落としている。当時「三族共和」(高砂族・漢族・大和民族の三民族が融合し、協力する)と植民統治の成功と結びつけられて喧伝された出来事をどう位置付けるのかなど、今日台湾に存在する異なる歴史の記憶を刺激し、社会の矛盾を顕在化させる。一九六〇年代後半の台東の紅葉少年野球チームの活躍によって、台湾の野球熱が再燃し、一九九〇年からはプロ野球として定着するが、オリンピックおよびWBCでの敗退は「国魂」を傷つけ、繰り返し返される八百長事件などもあり人気は低迷

気味である。

## ●「チャイニーズ・タイペイ」の壁

国際大会において、台湾が用いる名称は「チャイニーズ・タイペイ」である。中華民国でも、台湾でも、フォルモサでもない。

過去にオリンピックでは中華民国という名を三回程度使用したことがあるが、一九七一年に国連を脱退した中華民国政府は、中華人民共和国が「台湾は中国の一部」と強く主張するなかで、一地方とみなされうる「TAIWAN」の使用を拒否した。一九八〇年代に台湾は「チャイニーズ・タイペイ」(中華台北)の名での参加に合意し、国際舞台へ復帰する。

しかし、中国と台湾との関係は、現在においても台湾のスポーツに如実に反映される。二〇〇八年の北京オリンピックでは、聖火リレーのルートが問題化し、結局聖火は台湾を通過しなかった。また二〇〇九年七月高雄でのワールドゲームズでは、開会式に「中華民国総統」として馬英九が出席をすることを事前に知った中国が、競技には参加したものの開会式と閉会式への参加を取りやめた。

モントリオール（一九七六年）

およびモスクワ（一九八〇年）オリンピックへの不参加、各競技団体からの脱退を余儀なくされた一〇年の空白は、次の一〇年の国際大会での成績に影を落とすことになった。こうしたなかでオリ

ピックでの初メダルを台湾にもたらしたのが、テコンドーである。テコンドーは、一九六六年蒋介石の息子である蔣経国国防部長のもとで軍隊に導入され、その後警察、民間へと広まった。二〇一〇年当時台湾には一〇三一のテコンドー道場があるといわれ、二〇〇万を超える競技人口があった。こうした普及を背景に、一九八〇年代は陳怡安がけん引、二〇〇四年（アテネ）に陳詩欣が金メダルを獲得したが、近年競技者の減少が著しい。

### ●新しい誇り—ウルトラマラソンと綱引き—

林義傑、ウルトラマラソンの選手であり、冒険家として台湾ではよく知られている。彼は、二〇〇二年にサハラ砂漠横断、二〇〇四年にチリ・アタカマウルトラマラソンでの優勝をはじめ、二〇〇六年第一回世界四大極地ウルトラマ

ラソンで総合優勝、アマゾン、七五〇〇キロのサハラ砂漠（一一日間）、イスタンブールから西安までのシルクロード一万キロ、三二〇〇キロのゴビ砂漠を走りぬいた「強者」である。

林義傑に続き、陳彦博も北極やヒマラヤでのウルトラマラソンで活躍し始めている。実は、台湾はマラソン人口が多く、二〇一四年に四二・一九五キロ未満のレースが二五〇、それ以上のレースが一〇開催され、世界のなかでも日本に次ぐ第四位の多さである。一九九〇年代以降のレジャーの普及にともない、ジョギングやフィットネスなど一般人が参加するスポーツ活動が爆発的に増加してきた。そのなかで、林義傑らは数々の苛酷な困難と逆境を乗り越え、世界で活躍をするという台湾の夢を背負った象徴的な存在となっている。

また、ここ一〇年来根強い人気をもつのが、「拔河」（綱引き）である。水害で壊滅的な打撃を受けた高雄の甲仙郷の人々を描いたドキュメンタリー映画「抜一条河」、「景美女中」（高校）を中心とする代表チームの活躍を題材とした青春映画「志気」が話題となるなど、

マイナースポーツに思われがちな綱引きは、台湾での社会的認知度が高い。

一九〇〇年のパリオリンピックから第七回大会まで正式種目だった綱引きは、二〇二〇年東京オリンピック追加競技の候補のひとつとして「復活」が注目されている。台湾からは、これに熱い視線が送られているのである。

一九九二年に呉文達を理事長として拔河運動協会が設立され、八人制のスポーツ競技として学校単位でのチームを中心に拡大した。二〇〇〇年の第六回世界綱引選手権大会での六位に始まり、高雄ワールドゲームズでの優勝でも注目を集め、二〇一四年の国内の全国大会では九〇を超えるチームが参加している。

なかでも一九九七年に進学校に結成された「景美女中」チームの活躍は目覚ましく、二〇一四年アメリカでの世界大会に、師範大学と合同して代表チームを作り、五四〇キロ級で銅メダル、五〇〇キロ級で優勝し三連覇を果たした。

### ●後追いするスポーツ政策

政府は、二〇一三年にも「体育スポーツ政策白書」を発表し、運

動習慣の拡大、国際競技力の引き上げ、産業の育成などの目標を掲げている。しかし、現状は、マスコミで「台湾之光」などと注目される選手たちの活躍に依存して、国民の「誇り」をとり戻し台湾の知名度をあげようとする後追い状況にある。

歴史の記憶やナショナルリズムと結びつき、社会の一体感の醸成と亀裂の顕在化の双方向に微妙な作用をもたらしてきた台湾のスポーツだが、台湾の誇りを構築していく新しい方向性も見出しうる。オリンピック競技にとられずに見渡してみれば、ウルトラマラソン、綱引き、自転車などの世界で、台湾は相当に熱いスポットである。

（しみず うらら／東京大学東洋文化研究所特任研究員）